

大分市埋蔵文化財調査年報 1

—平成元年度—

1990

大分市教育委員会

大分市埋蔵文化財調査年報 1

— 平成元年度 —

1990

大分市教育委員会



井戸内出土墨書き土器



井戸跡（下郡遺跡群）

序 文

本年報は、平成元年度に実施しました市内における埋蔵文化財の調査成果の概要を収録するものです。

最近の埋蔵文化財の新発見にはまことに目を見張るものがあり、興味と関心がとみに高まっていますが、市内の遺跡におきましても、県下はいうまでもなく、日本の古文化解明に新しいページを加えなければならないような貴重な成果を少なからずあげてきています。

東九州の中核都市として躍進する郷土大分を誇りに思い、文化の香る新しい都市(まち)づくりを進めていく上で、この年報が多くの方々に広く活用されますよう期待をいたしますとともに、文化財の保護に向けて、今後、いっそうのご理解、ご協力をいただきますようよろしくお願ひ申し上げます。

平成2年12月31日

大分市教育委員会

教育長 安 東 裕

例　言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会文化財室が平成元年4月1日から平成2年3月31日の間におこなった埋蔵文化財に関する事業内容をまとめた年報である。
2. 平成元年度における調査地点は表2および第1図に示している。
3. 本書の執筆は第Ⅲ章　発掘調査内容の概要の項を各担当者がおこない、文末に執筆者名を記している。なお、豊後国分寺跡、高崎山城跡の2遺跡に関しては発掘調査を担当した玉永光洋(大分市歴史資料館学芸係長)の成稿になるものである。また、第Ⅳ章を除く他の部分については坪根が担当した。
4. 第Ⅳ章　受贈図書目録は、平成元年4月1日から平成2年3月31日の期間中に大分市教育委員会文化財室に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第Ⅳ章　受贈図書目録の作成は佐藤小夜(大分市教育委員会文化財室主任)と園田まゆみ(大分市教育委員会文化財室臨時職員)による。
6. 遺構・遺物の実測、図版の作成等において、河野史郎・橋本信和・渡辺里美・渕野玲子・西嶋スミエ(以下大分市教育委員会文化財室臨時職員)の協力を得た。
7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影し、第4～6図に使用した写真に関しては柴田義弘氏の提供を受けた。
8. 本書の編集は讃岐と坪根がおこなった。

目次

第Ⅰ章	大分市教育委員会社会教育課文化財室概要	1
第Ⅱ章	平成元年度事業概要	3
1	開発事前審査事業	3
2	(1) 平成元(1989)年度の概要	3
2	発掘調査事業	5
3	報告書等刊行事業	7
4	(1) 報告書刊行事業	7
5	(2) 資料整理事業	7
6	教育普及活動	7
7	(1) 遺跡現地説明会	7
8	(2) 講師の派遣	8
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要	9
9	・下郡遺跡群E区 ℓ -12地点	9
10	・下郡遺跡群F区 ℓ -8・9地点	11
11	・下郡遺跡群H区S-19~23地点	13
12	・久土遺跡	15
13	・北の崎遺跡	17
14	・豊後國分寺跡	19
15	・下郡横穴群	21
16	・古國府町口遺跡	25
17	・葛木遺跡	26
18	・高崎山城跡	27
19	第Ⅳ章 受贈図書目録	29

目次

挿図目次

第1図	地区別事前審査内容	3	第28図	調査区全景(南より)	17
第2図	地区別事前審査割合(面積比)	4	第29図	SD04検山状況(西より)	18
第3図	平成元年度調査遺跡位置図	6	第30図	SD04遺物出土状況	18
第4図	遺跡見学① (大分市森岡文化財愛護少年団)	7	第31図	SD04完掘状況(西より)	18
第5図	遺跡見学② (大分市森岡文化財愛護少年団)	7	第32図	SD04遺物出土状況	18
第6図	川添小学校児童による遺跡見学会	8	第33図	調査グリッド配置図(アミ部)	19
第7図	出土器台実測図(1/4)	9	第34図	中門地区調査区遺構配置図	20
第8図	出土器台	9	第35図	南門基壇とされた近世遺構	20
第9図	調査区全景	10	第36図	下郡横穴群全体地形実測図	22
第10図	1号住居址完掘状況(東より)	10	第37図	横穴実測図(1)	23
第11図	SBO1及びSK・SE01全景(北より)	11	第38図	横穴実測図(2)	24
第12図	SHO1全景(北東より)	11	第39図	獨立柱建物群	25
第13図	SBO3検山状況(西より)	11	第40図	遺物出土状況	25
第14図	墨書き器(SE02)	11	第41図	葛木遺跡調査区全景	26
第15図	SE02上部(井戸側部)石組状況(西より)	12	第42図	葛木遺跡全体遺構配置図(1/300)	26
第16図	SE02土師壺・曲物出土状況	12	第43図	高崎山城跡位置図	27
第17図	SE02掘り方及び下部 (水溜部)木枠検山状況(東より)	12	第44図	第10号堅堀断面(南より)	27
第18図	SE02周辺の遺物出土状況(北より)	12	第45図	高崎山城跡遺構配置図	27
第19図	遺構配置図(1/800)	13	第46図	第8号堅堀発掘状況(東より)	28
第20図	調査区全景(北より)	13	表目次		
第21図	住居址(SH02)完掘状況(東より)	14	表1	開発事前審査件数の推移	4
第22図	SD02調査状況(東より)	14	表2	平成元年度調査地一覧	5
第23図	SH01全景	14	表3	遺跡現地説明会開催一覧	7
第24図	遺物出土状況	15	表4	講師派遣一覧	8
第25図	久土遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/60000)	16	表5	調査横穴一覧	22
第26図	周辺遺跡分布図	17			
第27図	SH2a・b、SH3完掘状況(東より)	17			

第 I 章

大分市教育委員会社会教育課文化財室概要

1. 沿革

昭和51年4月1日 大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日 大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組

2. 組織

社会教育課 文化財室	課 室	長 長	山 椎 野 秦 主 任 任 主任技師 主任技師 技 師 技術員	村 原 尻 是 佐 永 藤 岐 鼻 坪 池 邊	輝 政 政 和 小 和 光 司 伸 太 郎	晃 男 文 博 英 夜 夫 司 也 （平成2年度～）
---------------	--------	--------	--	--	---	---

大分市文化財室設置規則（抜粋）

昭和59年6月28日教育委員会規則第5号
改正昭和62年9月29日教委規則第16号

（設置）

第1条 文化財行政の円滑な推進を図るため大分市文化財室（以下「室」という。）を設置する。

（組織）

第2条 室は、教育委員会事務局社会教育課に所属するものとする。

（分掌事務）

第4条 室の分掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 文化財調査委員に関すること。
- (2) 文化財に関すること。
- (3) 文化財保護思想の普及啓蒙に関すること。

附則抄

（施行期日）

1 この規則は、昭和59年7月1日から施行する。

附則（昭和62年教委規則第16号）

この規則は、昭和62年10月1日から施行する。

3. 大分市文化財調査委員会

大分市文化財調査委員会委員（平成元年5月1日現在）

	【氏名】	【勤務先・職名】	【担当】
委員長	佐藤 真一	やまばと幼稚園・園長	動植物
副委員長	橋本 操六 北野 隆 日高 稔 橋 昌信	大分県総務課・参事 熊本大学・教授 宇佐高等学校・教頭 別府大学・教授	中世 建物 地質鉱物 考古埋蔵

西別府	元	日	大分大学・助教授
豊田	寛	三	大分大学・教授
宗像	健	一	大分県立芸術会館・主任研究員
友永	尚	子	大分県立芸術会館・主任学芸員
小泊	立	矢	大分県総務課・主幹

古近	美工	代世
美工	俗	術芸
民		代

大分市文化財調査委員会条例

昭和51年3月29日条例 第4号

(設置)

第1条 地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の4第3項の規定に基づき、大分市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に大分市文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(任務)

第2条 委員会は、教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要な事項について調査審議する。

(組織)

第3条 委員会の委員は、10人以内とし、学識経験者のうちから教育委員会が委託し、又は任命する。

2 委員は、非常勤とする。

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とし、その欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。ただし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員が互選する。

2 委員長は、委員会の会務を総理する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 会議は、必要に応じ、委員長が招集する。

2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

3 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(部会)

第7条 委員会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、教育委員会社会教育課において処理する。

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附則抄

(施行期日)

1 この条例は、昭和51年5月1日から施行する。

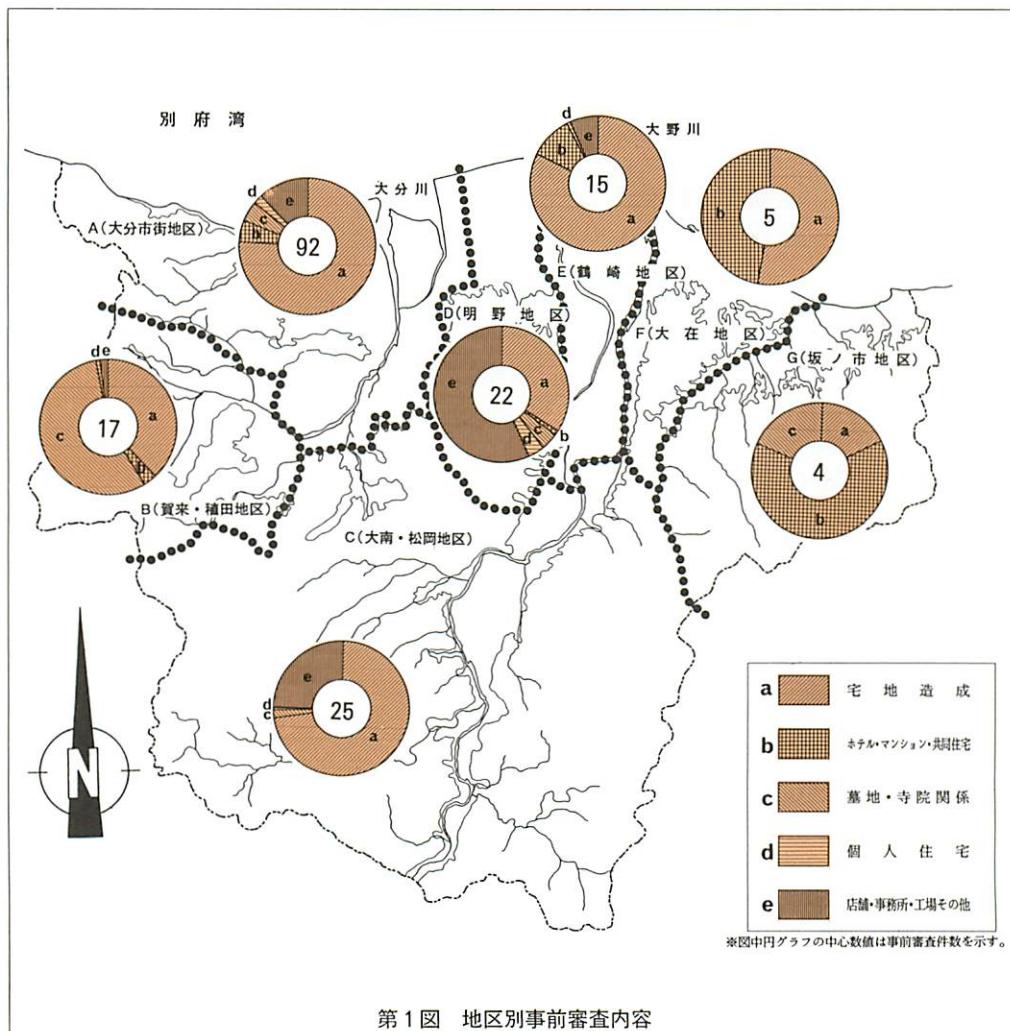
文化財室
規 要

第Ⅱ章 平成元年度事業概要

1. 開発事前審査事業

(1) 平成元(1989)年度の概要

大分市域では長期的な安定給水を指向した給水施設等の第4次拡張事業を実施するに際し、建設省の計画している大分川ダムの開発水量に新規水源（水利権）の確保を決定。これを受け、昭和56年度からの宅地開発事業の規制が緩和されるに至った。表1は昭和58年度から平成元年度までの年次別開発事前審査件数と、それらの審査に伴う埋蔵文化財の分布調査（現地踏査）、試掘調査件数の推移を示している。この中で昭和62年～平成元年度にかけての大幅な件数増加が見られるのは上記の規制緩和を反映したものである。また、件数の増加もさることながら1件あたりの申請面積の増大が目立ち、申請対象面積での前年度比は数倍によよんでいる。

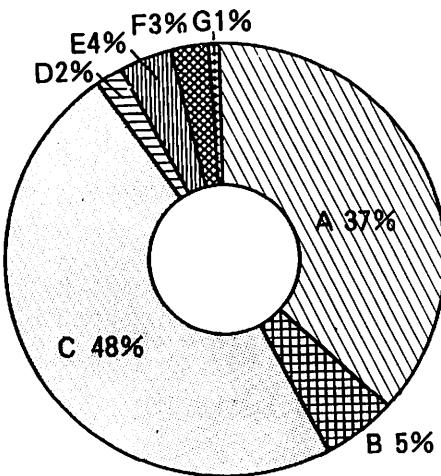


本市文化財室では申請受理後、過去の調査データ等による書類審査→分布調査（現地踏査）→試掘調査→本調査というステップフローの内容・結果に応じて、各関係機関・関係者に対し埋蔵文化財保護の協力をお願いしている。規制緩和に伴う申請件数ならびに対象面積の飛躍的な増加は、必然的に分布調査（現地踏査）、試掘調査の増加を生じている。

さて、ここで平成元年度における開発申請内容について、概観してみよう。

平成元年度の事前審査対象面積の総計は1,521,740.72m²に及ぶ。これを地域別面積比で示すとその8割以上がA（大分市街地地域）、C（大南地域）の2地点に集中しているが、これらはいずれも開発規制の緩和に伴う大規模団地建設のための造成工事が大部分を占めており、A地域の周辺部、C地域の国道10号線沿いに集中分布する傾向を看取することができる。

大型団地建設に伴う大規模土地造成は本年度における開発事前審査対象面積の実に74%を占めており、暫定水利権の確保にともなう大規模開発規制の緩和の影響を如実に示している。しかも、来年度以降の展望として、開発許可申請の前段階に提出される大規模土地取引事前指導申請書中に示された面積は本年度の事前審査対象面積の2倍に達しており、これらが順次来年度以降において開発行為として事前審査を求めてくるのは確実視されるところである。



第2図 地区分別事前審査割合(面積比)

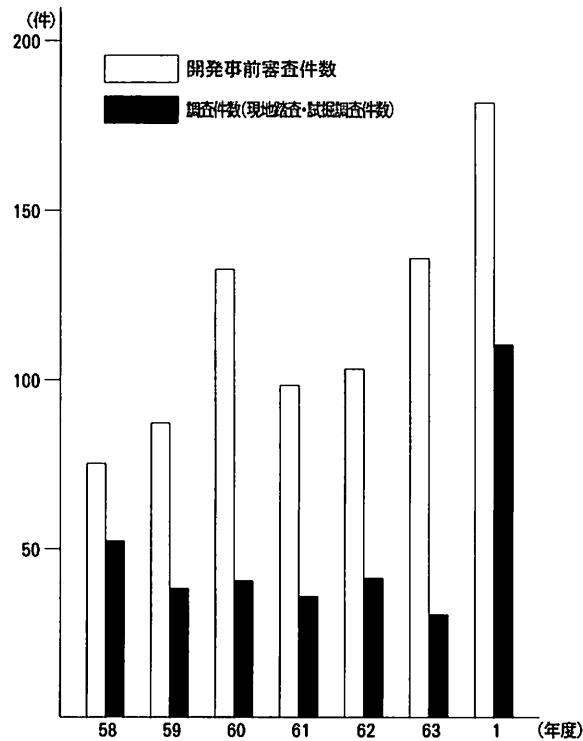


表1 開発事前審査件数の推移

2. 発掘調査事業

本年度は試掘確認調査14件、本格調査15件を実施した。

試掘確認調査は、総件数14件の内、宅地造成・住宅建設に伴うものが全体のおよそ75%を占め、病院建設・寺院建設、墓地造成、学校建設に開発原因を求められるものがこれに続く。調査対象の総面積は75,194m²に及んでいる。試掘確認調査によって遺跡の存在が確認された場合、設計変更等により現状保存の可能な箇所については原因者の協力により保存措置を行っている。しかしながら、近年、開発面積の大規模化、構築物の高層化に呼応し現状保存の困難な事例が増大する傾向が顕著であり、本格調査へ移行し記録保存といった形での保存形態をとらざるを得ない状況を多呈している、本格調査は15件実施しているがその原因別内訳をみると、公共事業11件、民間事業4件を数える。以下において本年度の発掘調査の調査成果を概観しておきたい。

今年度、弥生時代に比定される遺構・遺物は大分市域内において最も多量に検出することができ、多大な成果をあげている。下郡遺跡群では弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられる貯蔵穴を多数確認し、これらの中には良好な一括資料を内包するものも存在し、当該期の土器編年作業に際して有効な資料となるであろう。また、久土遺跡では従来未解明であった弥生時代中期中頃～後半に比定できる資料も少なからず存在し、大分市域における弥生時代中期資料の充実が着実に達成されつつある。また、弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期のものでは北の崎遺跡、下郡遺跡群において良好な資料が呈示された。いずれも大規模な溝を伴う集落遺跡であ

表2

調査地一覧

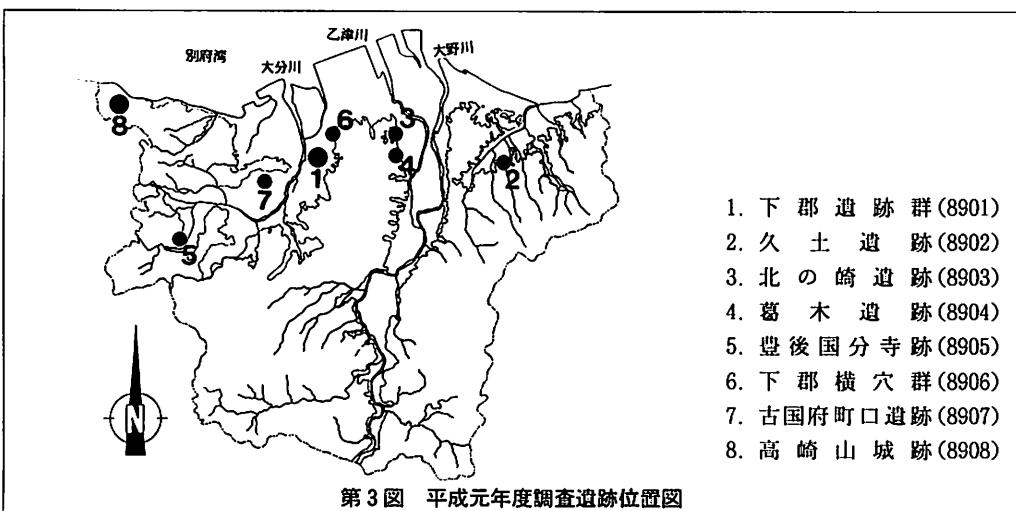
調査番号	台帳番号	遺跡名	所在地	地塊	調査原因	調査期間	担当調査員
8901	a	下郡遺跡群	大分市大字下郡	A	区画整理	8904～9003	坪根
	b	B区e-13地点	"		"	"	"
	c	D区n.0-18~20地点	"		"	"	讃岐
	d	E区n.0-11~12地点	"		"	"	坪根
	e	E区f-12地点	"		"	"	坪根
	f	F区f-8.9地点	"		"	"	讃岐
	g	F区o-9地点	"		"	"	"
	h	G区m,n-5地点	"		"	"	"
		H区s-19~23地点	"		"	"	坪根
8902		久土遺跡	大分市大字久土	G	ほ場整備	8904～8909	塔鼻
8903		北の崎遺跡	大分市大字北の崎	D	宅地造成	8902～8906	讃岐
8904		葛木遺跡	大分市大字葛木	D	宅地造成	8904	塔鼻・坪根
8905		豊後国分寺跡	大分市大字国分	B	史跡整備	8905～8909	玉永
8906		下郡横穴群	大分市大字下郡	A	墓地造成	8908～8909	讃岐
8907		古国府町口遺跡	大分市大字古国府	A	変電所建設	8911～9001	塔鼻・河野
8908		高崎山城跡	大分市大字神崎	A	登山道整備	8909～8911	玉永

り、住居址群と溝の一部を検出している。出土遺物も土器を中心に相当量におよび、当時期の様相解明の一助となろう。

古墳時代の遺構・遺物は、下郡遺跡群、下郡横穴群、北の崎遺跡、久土遺跡において検出されている。下郡横穴群の調査は今年度唯一の墳墓の調査である。いずれもすでに開口しており、遺物は僅少であったが、総数14基の図化を実施することができ、当地域の横穴墓の変遷究明に資するところは大きい。他の遺跡では5世紀～6世紀の前半を中心とする住居址を確認しており、当該時期の集落の一部を捕捉した。なかでも下郡遺跡群において検出された住居址内においては、多量の土師器とともに須恵質の器台形土器を出土し、胎土分析の結果から、この土器が「陶質土器」である可能性も示唆されている。出自解明には類例の探索などさらなる多角的な分析が必要ではあるものの、豊後地域で最古式に位置づけられる資料であり今後種々の問題を提起するものと考えられる。

奈良時代～平安時代に比定される遺構・遺物の出土は、下郡遺跡群および豊後国分寺跡において確認されている。下郡遺跡群では該期の井戸跡を検出し、内部より多数の土器、曲物、綠釉陶器片・墨書き土器等多彩な遺物が出土した。また、調査対象区域内において円面硯が採集されるなど当該期の遺跡性格の具体的な把握究明の必要性が急務とされる所である。豊後国分寺跡の調査は当地の史跡整備に伴うものである。

中世時期の調査は古国府町口遺跡・高崎山城跡の2件について実施した。古国府町口遺跡では、居住区を区画する溝状遺構とともに、3時期にわたる掘立柱建物群を検出し、当地域の集落変遷に関する資料を提供した。高崎山城跡の調査は登山道の整備に伴うものであり、道路部分にかかる堅堀11本について調査を実施した。城跡の一角の調査ではあったが、山城の調査事例としては市内では初例となるものであり、戦国期の様相解明に先鞭をつけるものとして今後の展開が注目される。



3. 報告書等刊行事業

本年度は3遺跡の資料整理と下記の調査報告書を刊行した。

(1) 報告書刊行事業

「下郡遺跡群」—大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(1)—

1990年 大分市教育委員会

(2) 資料整理事業

本年度は前述の報告書刊行に伴う資料整理の他、以下の3遺跡の資料整理を実施した。

〔調査番号〕	〔遺跡名〕	〔所在地〕
8902	久土遺跡	大分市大字久土
8903	北の崎遺跡	大分市大字北の崎
8904	古国府町口遺跡	大分市大字古国府

4. 教育普及活動

(1) 遺跡現地説明会

本年度は以下の2遺跡において遺跡現地説明会を実施した他、下郡遺跡において4件の遺跡現地見学会を開催した。

表3 遺跡現地説明会開催一覧

調査番号	遺跡名	所在地	開催日	参加人数
8901	下郡遺跡群	大分市大字下郡	平成2年1月7日	約100名
8907	古国府町口遺跡	大分市大字古国府	平成2年3月4日	約70名

下郡遺跡群での遺跡現地説明会ではF区 ℓ -8地点において検出された奈良時代に比定される井戸跡を一般に公開し、併せて下郡地区内のこれまでの調査で出土した主要遺物の展示公開を実施した。また、見学者の理解の便に供するよう参考資料として大分市域内で同時代の遺跡として著名な豊後国分寺跡（大分市大字国分）



第4図 遺跡見学①(大分市森岡文化財愛護少年団)



第5図 遺跡見学②(大分市森岡文化財愛護少年団)

と地蔵原遺跡（大分市大字小池原）の出土遺物の陳列もおこない、およそ2時間で遺跡現地説明会を終了した。

古国府町口遺跡では中世（15～16世紀）と考えられる溝状遺構と掘立柱建物群を検出し、調査担当者による概要説明の後、遺跡内の自由見学をおこなった。

今年度は下郡遺跡の発掘調査現場において4件の遺跡見学会を実施した。

1	大分市立中島小学校児童（6年生）	98名	1989年6月7日
2	大分市立川添小学校児童	約100名	1989年6月15日
3	滝尾小学校家庭教育学級生	約40名	1989年10月29日
4	森岡文化財愛護少年団	約20名	1990年3月20日

（2）講師の派遣

今年度は大分市コンパルホール主催の「郷土史講座（遺跡）」に以下の日程・内容で埋蔵文化財担当職員を派遣した。

表4 講師派遣一覧

開催日時	テーマ	受講者数	派遣職員数
平成元年5月17日	「大分市の埋蔵文化財」	約70名	1名
平成元年9月20日	「大分市の弥生遺跡」	約70名	1名
平成元年10月18日	「3世紀の大分」	約70名	1名
平成元年11月14日	「古墳時代1」	約70名	1名
平成元年12月20日	「古墳時代2」	約70名	1名
平成2年1月17日	「地蔵原遺跡は語る」	約70名	1名



第6図 川添小学校児童による遺跡見学会

第Ⅲ章 発掘調査内容の概要

1 下郡遺跡群 E区I-12地点	調査担当 坪根伸也	調査面積 150m ²	調査期間 89.10	地域 A
---------------------	--------------	---------------------------	---------------	---------

本調査地点は同遺跡群の調査対象範囲のほぼ中央に位置し、現有集落内に所在する。調査は、約150m²について実施し、以下のような多くの注目すべき成果を得ることができた。

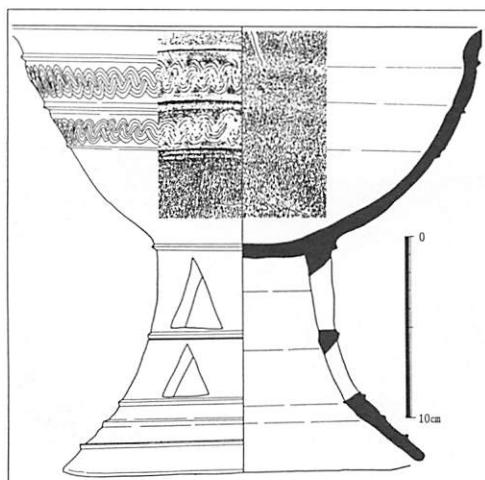
調査は区画整理事業の仮設道路建設に先立つ事前調査として実施した。道路建設予定地域のうち、今回実質的に調査をおこなった約150m²の西側と東側は規模の大きな後世の搅乱によりすでに遺構は消失し確認されない。

調査の結果、弥生時代中期の貯蔵穴、古墳時代住居址、中世時期の井戸跡、溝状遺構を検出した。

住居址は調査区の西側部分において検出された。当初1軒と判断していたものであるが、調査の結果、切り合い関係にある2軒の規模の異なる住居址により構成されることが明らかとなった。すなわち、壁溝を住居内壁際に巡らし4本の主柱穴を有するもの（1号a住居址）と他の方は南北方向に並置する2本の主柱穴を有するもの（1号b住居址）の2者である。これらには1号a住居址→1号b住居址の先後関係が認められる。

1号a住居址は規模が1号b住居址よりも一回り小さく僅かに柱穴と壁溝が遺存するのみである。壁溝から推定される規模は4.8m×4.2mを測り、4個の主柱穴を有する。主柱穴は現状で径約0.25m、深さ0.27mを測る。

1号b住居址は現状で5.4m×4.9m、壁高0.3mの規模を有し、南方向に若干長い略長方形を呈する方形住居址で2本の主柱穴をもつ。主柱穴は直径約0.3m、深さ約0.5



第7図 出土器台実測図(1/4)



第8図 出土器台

mを測る。炉跡等は確認されない。

遺物はすべて床面より若干浮いた状況で検出され、1号b住居址埋没過程中に遺棄されたものと判断される。多量の完形復元の可能な土師器を内包し、甕形土器、壺形土器、小型丸底壺、高壺、台付鉢、てづくね等の器種を存する。なかでも特に高壺の出土割合が極めて高い点において注目される。また、これらの土師器に随伴し一個体分の器台形土器が出土しており、当土器の出自に関して、胎土分析によつて興味深い結果を得た。分析による提示領域は福岡県牛頸窯群あるいは韓国産のものに近いデータを示している、牛頸窯で初期須恵器窯が発見されていない現況においては韓半島で製作された「陶質土器」である可能性も少なからず存しているといえよう。とはいえて出自解明には彼地における類例の探索等によるさらなる検討が必要であることは言うまでもない。今後の資料の増加に期待したい。

出土した器台形土器は復元すると、口縁部の一部を僅かに欠くだけではほぼ完形となる。胎土には精製土を使用し、焼成は非常に良好である。色調は暗青黒色を呈する。器高24.7cm、口径27.2cm、脚裾部径20.0cm、壺部高12.0cm、脚高12.7cmを測る。口縁端部は大きく外反し、壺部上半に3本の三角突帯を作出する。これらの三角突帯は下方部のものほどそのシャープさを減じ、最下段のものにいたっては非常にだれた様態を示す。また、突帯間に用意された2つの帯状空間には単位5条の櫛描波状文が施文される。波状文は回転運動を効率的に利用し施文されたものとは言いがたく、全体に粗く稚拙な印象を受ける。脚裾部には焼成時のユガミがみられ、壺部から脚裾部の間には5条の三角突帯を作出する。上位3本の突帯間には二段縦列式の三角透かしを3ヶ所に配置する。内・外ともに丁寧な横ナデ調整が全面に施される。

下郡遺跡群内のこれまでの調査所見によれば、弥生時代中期および弥生時代終末期に大規模な遺跡分布の拡大傾向が看取され、その後一時的に遺構密度は減少する。過去3年間の調査においては弥生時代終末期～古墳時代初頭の時期以降に続くものは6世紀に比定されるもので、その間の遺構遺物は確認されておらず、時間的な空白を生じていた。今回の資料はおよそ5世紀中頃に比定されるものと考えられ、上記の間隙を埋める良好な資料といえよう。

(坪根 伸也)



第9図 調査区全景



第10図 1号住居址完掘状況(東より)

2 下郡遺跡群 F区I-8・9地点	調査担当	調査面積	調査期間	地域
	讃岐和夫	700m ²	89.12～90.2	A

本調査地点は、学校建設用地に隣接する6m幅の街路予定地である。

調査の結果、古墳時代初頭～中世にかけての複合遺跡であることが判明した。遺構については、古墳時代初頭の住居址1軒、奈良時代の掘立柱建物群3棟、井戸跡2基、中世の土壙墓5基と区画性のある溝状遺構等が確認できた。

まず、4世紀頃に比定されると思われる古墳時代の長方形竪穴住居跡（SH01）については調査区の南側に位置し、長軸を南西一北東に向いている。SH01の規模は3.60m×4.92m、壁高の現高は0.26mを測る。炉跡はなく主柱については2本柱であろう。遺物は中央よりに2個体の高杯が出土したのみである。この地域は、5～6世紀の住居址については検出されていたが、今回の調査で1軒ではあるが4世紀頃の住居址を確認されたことは注目される。奈良時代の遺構については、本調査区の北東側F区J-5・6地点で昭和62年度において6棟の掘立柱建物を確認しており、今回の調査でも掘立柱建物（SB）が3棟検出された。この建物の中で全体の規模がわかるものはSB01のみである。2間×4間（4.6m×6.9m）で主軸の方位はN-12°-Wを示している。柱穴の径約0.8～1.1m、深さ約0.6mを測る。SB02は2間×2間（3m×4.2m）、SB03は3間×3間の束柱をもつ倉庫と思われる。柱穴の中からは布目瓦片が1点出土した。

また、井戸跡（SE）では素掘状の井戸（SE01）と上部の井戸側部分を河原石の石組、下部の水溜部をクスノキの半截丸太くりぬき材をあわせたものを埋置した井戸（SE02）の合わせて2基である。井戸跡の規模については、SE01では2段掘りになっ



第11図 SB01及びSK・SE01全景(北より)



第12図 SH01全景(北より)



第13図 SB03検出状況



第14図 墨書土器(SE02)

ており、外側の掘り方は径2.7m、深さ1.80m、内側の水溜部分は径1.6m、深さ1.92mを測る。SE02では掘り方部分の径3.1m、深さ1.80mを測り、丸太くりぬき材の大きさは最大径1.20m、厚さ0.08~0.10mを測る。SE02の作り方は、水溜部の半截丸太くりぬき材を井戸掘り方の東壁に寄せて組み立てている。このことは作業能率等を考えたものであろう。この丸太くりぬき材使用の井戸は下郡遺跡内（H区で確認）で2例目の検出となる。

遺物は、SE02の中と周辺から8世紀頃に比定されると思われる土師の壺、碗、蓋、盤、高壺、甌、須恵器の大型甌や移動式カマドの焚口部片等、多量に出土している。特に井戸の中から出土した曲物や綠釉陶器片、『山』と書かれた墨書き器片等は注目すべきものである。

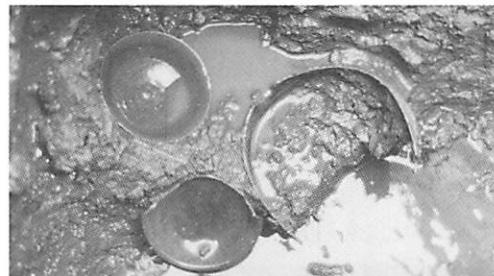
中世の遺構は、溝状遺構と土壙墓5基が確認されている。土壙墓の平均規模は長さ1~2.50m、幅1m、深さ0.12mを測る。遺物については1号土壙墓から15~16世紀に比定される土師器の壺が出土したのみである。

溝状遺構についてはN-20°-E方向に掘られ、直角に近い屈曲部をもつこの溝状遺構は水路的な要素だけでなく、居住地域を区画するものと考えられる。この地域には「城ノ内」「堀向」「高城」といった中世的な地名が残っており、遺構や出土遺物の特性、豊富さ等と合わせ、大分川河口付近にあたる地理的特性からみても大分郡における古代、中世史の展開上、極めて重要な位置を占めていたことが想定される。

（讃岐和夫）



第15図 SE02上部(井戸側部)石組状況(西より)



第16図 SE02土師壺・曲物出土状況



第17図 SB02掘り方及び下部(水溜部)木枠状況(東より)



第18図 SE02周辺の遺物出土状況(北より)

3 下郡遺跡群 H区S-19~23地点	調査担当 坪根伸也	調査面積 2500m ²	調査期間 89.04~89.09	地域 A
------------------------	--------------	----------------------------	---------------------	---------

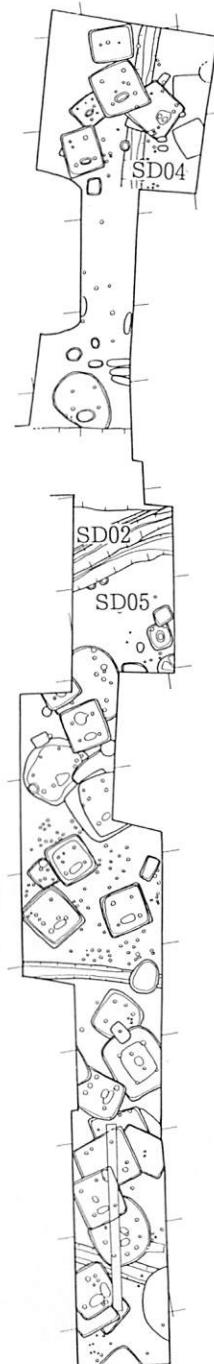
調査は下郡地区土地区画整理事業に伴う事前調査の一環として実施された。

今回の調査地点は区画整理対象地域内の南西部分に相当し、大分川右岸の標高5~6mの自然堤防上に立地する。

調査の結果、弥生時代終末~古墳時代初頭に比定される堅穴住居38軒と方形土壙5基、溝状遺構5条、柱穴多数を確認した。これらの中で調査区中央に確認された弥生時代終末~古墳時代初頭に廃絶されたと考えられる溝跡(SD02)は形状、溝内堆積土層、および内包する土器の諸相等が本年調査地点の東側150mにおいて確認された溝状遺構に酷似する。また溝の方向もよく一致し、さらには周辺のトレンチ調査による所見等を考慮すれば、これらの溝が連続する同一遺構である可能性は極めて高いと推定される。溝跡は断面V字形をなし、検出面での幅4~5m、深さ約2mを測る。検出長11mにわたり検出したが、溝は南方向に緩やかな弧を描きながら南西方向へ延びている。この溝方向は大分川に沿って帯状に展開する自然堤防上の微高地形状に呼応するものであり、溝の全容は条溝的な様態を示すのではなく、環濠として帰結するのではないかと考えられる。また、本溝跡には掘り直された状況が認められ、溝の機能期間中になんらかの理由で埋没するといった事態にみまわれ再度同じ場所に構築されたことが伺える。埋没の要因は種々の事象が考えられ即断することはできないが、最初に掘られた溝埋土の最下層に相当する土層内にラミナが見られ、さらには本地点の基盤土層である灰色砂質土層のブロックを少なからず内包する事実を併慮すれば、水性作用による基盤土層の浸食も埋没の1要因と考えることも可能であろう。実際、



第20図 調査区全景(北より)



第19図
遺構配置図(1/800)

本地点の基盤土層（灰色砂質土層）は他地点のものとは異なり非常に脆弱である。調査期間中においても雨水等による流水のたびにその形状を変形させる。遺物には原形を留めた多量の土器のほか、土錘、石庖丁等がある。土錘には13個の管状土錘と4個の有孔土錘（双孔棒状土錘）があり、いずれも70gを越える大型品ばかりである点が注目される。SD05はSD02の南側に位置し一部に切り合いを有しながらほぼ同様の方向へ展開する溝状遺構である。遺物は少なく僅かに須恵器小片と土錘、完形に復元可能な土師器壺2個体分が出土したのみである。土師器壺は溝底において検出され、当溝の帰属年代を示しているとみて大過ないであろう。これらは底部に「手持ちヘラ削り手法」を残し、およそ8世紀前半代に比定できる資料であり、溝も当時期のものと考えられる。下郡遺跡群内においてはF区を中心に8世紀中頃～9世紀にかけての遺構・遺物の出土はこれまでの調査で確認されていたが、8世紀前半代にさかのぼりうる資料は皆無であった。したがって今回のSD05において当該期の遺構・遺物の存在をはじめて認知することになり、今後の調査に新たな課題を付与することになった。他に弥生時代中期の所産になると推定される溝状遺構も一条検出している（SD04）。当溝は現存深度0.92mを測り断面U字形を呈する。南北方向へ直走し、他の溝とは方向を異にする。溝内から出土する遺物は少なく、甕形土器口縁部破片、磨製石斧片等が出土した。本地点唯一の弥生時代中期の遺構である。柱穴については径約20～30cmを測るものが大部分を占める。柱穴の内部には弥生土器の小片を含むものが多いが、一部に磁器の小破片を内包するものもあり、これらの帰属年代をにわかに決することは困難である。「建物」として認識されるような配置は今のところ確認できない。住居址に関しては平面形が円形を呈するもの、方形を呈するもの、前二者の中間形態を示すものが存在し、円形住居址→方形住居址への変遷をよく示している。住居形状に関しては円形と方形において主柱穴数に差異がみられるものの、南寄りの柱穴間に楕円形土壙を有し、壁際に壁溝を巡らすという点において、大分平野に一般的にみられる当該期の住居遺構と特に異なるところはない。また、検出住居の中には明らかに火災により焼失したと思われるものも数例存在する。出土遺物には、溝状遺構（SD02）、住居址を中心に一括廃棄されたと考えられる状況で多量の土器が出土した他、鉄鎌を中心とする鉄器類、砥石・石鎌などの石器類、土製勾玉、管玉等が出土している。

（坪根 伸也）



第21図 住居址(SH02)検出状況(東より)



第22図 住居址(SD02)検出状況(東より)

4 久土遺跡	調査担当	調査面積	調査期間	地域
	塔鼻光司	2500m ²	89.04～89.09	G

本調査は、大分市大字久土において大分市がおこなった農村基盤総合整備事業にともない、昭和63年度により行われたものであり、本遺跡の南東に位置する前田遺跡調査に続いて2年次目である。

本遺跡は大分市の東部、九六位山の麓より坂ノ市に流れる丹生川の造り出す平野部に広がる丹川遺跡群のほぼ中央、北に丹生川、東に久土川を見下ろす標高35mの台地上に位置する。

台地の東側斜面には城下横穴墓群があり、また西2kmには旧石器・縄文時代の丹生遺跡、丹生川を挟んで対岸の台地には弥生時代の一木遺跡等が存在する。

遺跡は台地上平坦部（A区）及び棚田となっている斜面（B区）に分布するが開墾によりかなり削平を受けており、遺構の検出状態は良くなかった。特に、斜面の棚田は耕作土を剥ぐと砂礫交じりとなるところが多く、辛うじて住居跡の一部と柱穴が検出された。

A 区

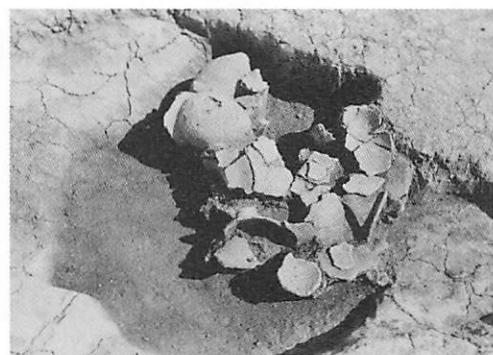
平坦部は現状では3枚の水田で構成されており、北からA-1区・A-2区・A-3区とした。1区は、削平が著しく小規模の柱穴がわずかに認められた。2区は、A区の中で一番広い面積を占め、土壙・柱穴等が検出された。3区は、水田の水利上A区の中で遺構検出レベルが最も下位であるが、2区に次いで状態は良く、土壙・柱穴等が検出された。遺物は、2・3区の遺構から弥生時代中期～後期の壺・甕・高环が認められた。

B 区

前述した通り遺構の状態がおもわしくなかったが、その中で1/3ほど欠いてはいるが、堅穴住居跡1軒（棟）が検出された。この住居跡は、方形で北側にかまどをもち、4本柱のものである。住居跡内からは須恵器壺が出土しており、6世紀後半に比定できよう。また、住居跡東側斜面下には城下横穴墓群があり、それとの関係



第23図 SH-01全景



第24図 遺物出土状況

も注目されるところである。

前田遺跡

本遺跡は、久土遺跡の南東を流れる小河川、久土川の作り出す狭隘な平野部に位置する。昭和63年度に農村基盤総合整備事業が行われることとなり、整備対象地区が丹生川遺跡群に含まれることから、対象地区内でトレンチによる試掘調査をおこなった。その結果、一部を除いて遺構・遺物が発見された。特に柱穴の集中する部分を拡張した結果、4棟の掘立柱建物と不定形の土壙が検出された。建物のうち1棟は2間×2間で総柱の倉庫、残りの3棟は居住用と思われる。遺物は、土師器の壺・碗・小皿・須恵器の壺など生活に密着したものが多く出土した。建物の規模や遺物などから奈良時代末～平安時代に比定される。

なお、当遺跡は遺構検出面が現地表面から1～1.5m下であったが、担当課と協議の結果、水田基盤の掘り下げを0.50m以内におさえて事業をおこなうこととし、遺跡の保護・保存をおこなった。
(塔鼻 光司)



第25図 久土遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/60000)

5 北の崎遺跡	調査担当 讃岐和夫	調査面積 3000m ²	調査期間 89.02～89.06	地域 D
---------	--------------	----------------------------	---------------------	---------

北の崎遺跡は、大分市大字葛木字北崎に所在する。宅地造成工事（民間開発）に伴い平成元年2月27日～同年6月27日までの間実施した。調査面積は約3000m²である。

本遺跡は大分市中心部より東方へ約6km、大野川河口より約4km上がった西側の鶴崎台地上にあり、標高約39mを測る台地先端部に位置している。この鶴崎台地には横尾・小池原・葛木にかけて台地平坦面が広く、数多くの遺跡が存在している。特に弥生中期の米竹遺跡、弥生後期の尾崎遺跡と溝状遺構をもつ多武尾遺跡、また弥生～平安時代初頭までの地蔵原遺跡等が所在している。

本遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての集落跡であることが確認できた。とくに弥生時代後期末にはV字溝をもつ環濠集落跡であることが判明した。

発掘調査区の遺構状況は、中央付近で南北方向に掘られた中世の溝状遺構があり、この遺構より西側に弥生～古墳時代の住居址（SH）が集中している。東側では後世の削平によって遺構の遺存状況は良くなかった。

堅穴住居址は19軒確認された。このうち弥生時代の円形住居址が14軒、方形住居址が3軒の計17軒、古墳時代初頭の方形住居址については2軒のみであった。

住居址の形態は円形住居址から方形住居址へと推移していく傾向がある。まず、S



第26図 周辺遺跡分布図



第27図 SH-2a・b・SH-3



第28図 調査区全景

H04・05の切り合い関係から円形住居址は一旦、主柱が8本→10本へと数が増し、大型化の傾向になり、再びSH04・05の切り合い関係から径8m～径6m前後の小型円形住居址へ縮小、主柱も4本となる。その後、形態がSH09・12の切り合い関係から円形住居址から一辺5,50mの4本柱の方形住居へと変化する。内部の施設は中央付近に炉跡があり、東側に灰溜土壙が掘られ、壁溝を有するものもある。古墳時代初頭では、SH10・14は一辺3,30m方形住居址で2本柱、柱間に灰溜土壙を有するものもある。弥生時代の住居址よりも更に縮小しており、本遺跡をみるかぎり、住居址の規模縮小化の現象がみられ、住居址は少なくとも4時期の増改築が行われていた。

住居址を囲む溝状遺構は、台地先端部の地形にあわせて弧を描くように掘られていた。現状の地形は段々畠になっており、住居址群との比高差は約4m前後を測る。現存のV字溝の規模は長さ約23mのみで、あとは削平されている。幅1,20～2,40m、深さ0,90m～1,30mを測る。溝内には夥しい量の土器が廃棄された状況で出土した。遺物は、壺、複合口縁壺、甕、鉢、高环、ミニチュア土器等がみられた。この遺存状況は溝状遺構をもつ尼ヶ城遺跡、多武尾遺跡、賀来中学校遺跡、雄城台遺跡、下郡遺跡の5遺跡についても同様な傾向を示している。本来、V字溝の機能は防衛的なものであったが、急速な時代の変化によって廃絶されたと考える。（讃岐 和夫）



第29図 SD04の検出状況(西より)



第30図 SD04遺物出土状況



第31図 完掘状況(西より)



第32図 SD04遺物出土状況

6 豊後国分寺跡	調査担当 玉永光洋	調査面積 412m ²	調査期間 89.05～89.09	地域 B
----------	--------------	---------------------------	---------------------	---------

今年度調査の目的は、中門、南門地区の整備に伴う発掘調査であるが本地区についてはすでに昭和63年度に中門、南面回廊、南門規模などの確認調査をI区で実施している。しかし、中門、南門の基壇位置および規模については確認できなかった。このため、今年度の調査は、63年度調査区の東（K区）、南（J区）側において再度調査をおこなった。調査期間は平成元年5月16日から9月6日である。

（a）中門地区の調査概要（K区）

推定伽藍中軸線の東側に3ヶ所の調査グリッドを設定した。

第1グリッド 位置（S81～89.8m、W6.6～E3.8m）発掘面積（約70m²）

第2グリッド 位置（S94～106m、W6.6～E4.3m）発掘面積（約80m²）

第3グリッド 位置（S108.8～111.7m、W0.6～E2.9m）発掘面積（約7m²）

調査の結果、第1グリッドでは削平が著しく礎石等の抜取り痕跡はなく中門推定北西隅においても、上層は市道工事による攪乱、下層は近世の溝（SD1）があるのみで門および回廊基壇等の痕跡は確認できなかった。第2グリッドにおいても、中門基壇の南側への張り出しあは検出できなかった。また、回廊に沿う東西溝遺構は、中門前面部分にはおよんでいないことが明らかとなった。その他の遺構としては、溝が埋まった段階で掘り込まれた不定楕円形竪穴が3基（SK1～SK3）、唐津皿の特徴から17世紀前半と考えられる4基の近世墓がある。出土遺物は、溝上層（回廊側に集中する）、不定楕円形竪穴内において多量の瓦のほか、土師器碗等がある。第3グリッドではとくに注意する遺構、遺物の検出はなかった。

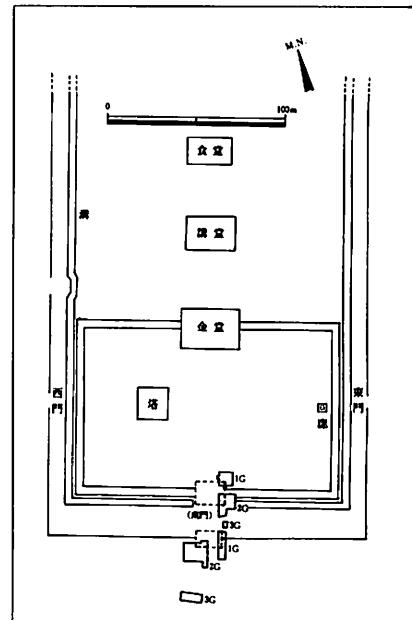
（b）南門地区の調査概要

昭和51年度調査で南門跡西南隅基壇の一部（地下約0.6mの掘り込み地業を施した版築層）と認められているS120、W13地点を中心に東（K区）と南（J区）側に3ヶ所の調査グリッドを設定した。

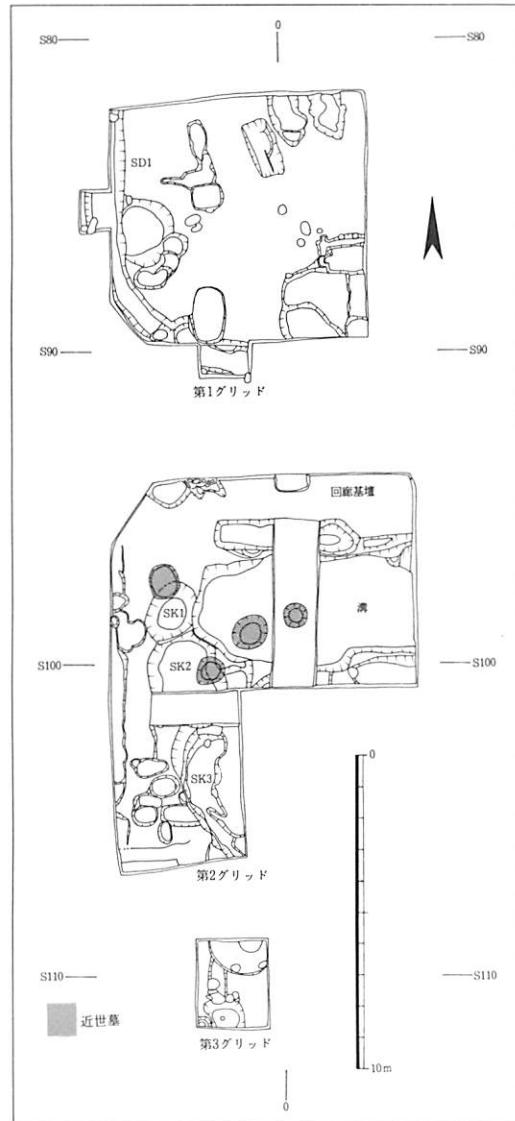
第1グリッド 位置（S114～129m、W1～5m）発掘面積（約60m²）

第2グリッド 位置（S120～130m、W11～23m）発掘面積（約140m²）

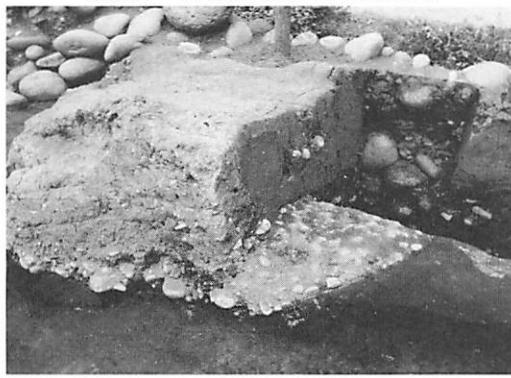
第3グリッド 位置（S148～153m、W13～24m）発掘面積（約55m²）



第33図 調査グリッド配置図（アミ部）



第34図 中門地区調査区遺構配置図



第35図 南門基壇とされた近世遺構

発 捜 調 査
豊後國分寺跡

南門跡西南部基壇の一部とされる部分の北側の探査については昭和63年度調査（I区）において実施し、後世の攪乱が激しく基壇遺構が確認できなかったことから、今年度は残存する南門基壇を再度調査をし、その西、東側の状況を知るために第1、第2グリッドを設定した。さらに、第3グリッドは、現況が道路の交差点になっており、万全を期すためにこの地点にも第3グリッドを設定した。調査の結果、南門跡基壇の一部とされた遺構の最下層において近世磁器片1点と石臼片1点が出土し、「石積みの化粧を施した掘り込み基壇」の遺構は奈良時代ではなく江戸時代であることが明らかとなった。また、基壇の一部とした地点の西、東（第1グリッド）側調査においても南門に関連する基壇痕跡などの遺構は検出されなかった。このことにより南門跡と考えられていた位置は、後世の攪乱により徹底的に破壊され遺構そのものが残存していないのか、または別の地点を想定するなど新たな問題や課題が残ることとなった。そのほか、整地層下より検出された南北溝は、国分寺創建以前と考えられていたが、これも出土遺物から室町時代であることが確認された。第3グリッドは、特に留意すべき遺構、遺物はなかった。出土遺物は奈良、平安時代はきわめて少なく瓦片が数点であった。そのほか、水路西側石積みの掘形埋土内より多量の伊万里を中心とする近世陶磁器が出土した。

（玉永光洋）

7 下郡横穴群	調査担当	調査面積	調査期間	地区
	讚岐和夫	横穴墓14基	89.08～89.09	A

下郡横穴墓群は大分市下郡字加納に位置する。調査における経過は民間業者による造成工事に伴うものであり、平成元年8月より9月にかけて調査が行われた。

本遺跡は大分平野の西側を流れる大分川の右岸にあり、明野から加納にのびる台地の北西端部の標高41～44m程の斜面に位置する。横穴墓は丘陵の東斜面から南斜面にかけて数十基の分布が認められる。このうち、南斜面の14基の横穴墓が調査対象となった。

この遺跡が分布する丘陵沿いには市指定の滝尾百穴横穴墓群を筆頭に、穴井前横穴墓群、松栄山横穴墓群など多数の横穴墓群が分布している。

大半の玄室内部には仏像を安置してこれを祭り、信仰の場としての二次的使用が認められる。出土遺物は第2号墓の壺蓋一点のみであり7世紀前葉の所産に当たられる。

調査を行った横穴墓は南斜面に二段にわたり造営しており、各横穴墓の位置関係により第1号墓、第2・3号墓、第4号墓～第7号墓、第8・9・11・13号墓、第10・12・14号墓の5単位群が設定できよう。

横穴墓の形態をみると大きく4つに分類する事ができる。

I 類 寄棟天井を呈し、奥壁沿いに屍床を設ける。（第2・5号墓）

II 類

a 平面形態が方形を呈し、天井と壁との境に軒状の張り出しを持ち、ドーム形天井を形成する。（第13号墓）

b 天井と壁との境が無く、四壁から丸味をもって天井部に至り、ドーム形天井を形成する。（第10号墓）

III 類

a 天井部はアーチ形を呈しており、奥壁との境が明確である。第8・14号墓は奥壁沿いに一段高くした屍床を設けている。（第8・14号墓）

b 天井部はアーチ形を呈しているが、III類aに比べやや丸味を帯びる。7号墓は、玄室床面を二分するように排水溝が設けられている。（第7号墓）

IV 類 平面形態は不整形の長方形を呈している。横断面形はアーチ状を呈するものの、奥壁の立ち上がりが見られず、直接天井部へつながり、羨道部の天井との境に段差が認められない。

これらの分類がどの時期に当たられるかは不明であるが、豊後地域における横穴墓群の様相からすればI類からIV類の順で大筋変遷したと思われる。

周辺地域には、滝尾百穴墓群を始めとして、高瀬横穴墓群と穴井横穴墓群が点在するが、この付近における調査は初めてであり、この時期における墓制を知る上で重要な資料であると言えよう。

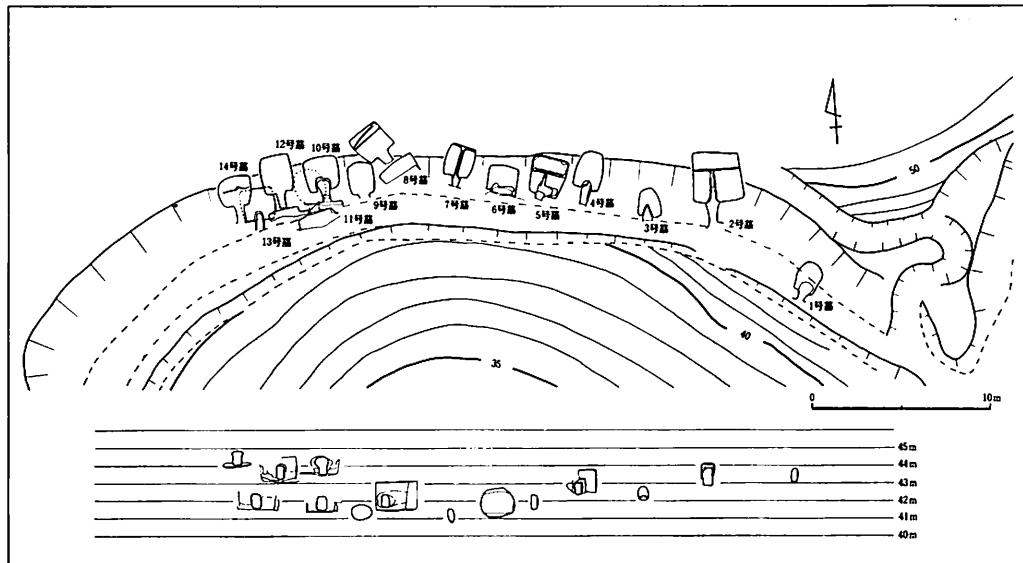
（池邊千太郎）

表5 調査横穴一覧

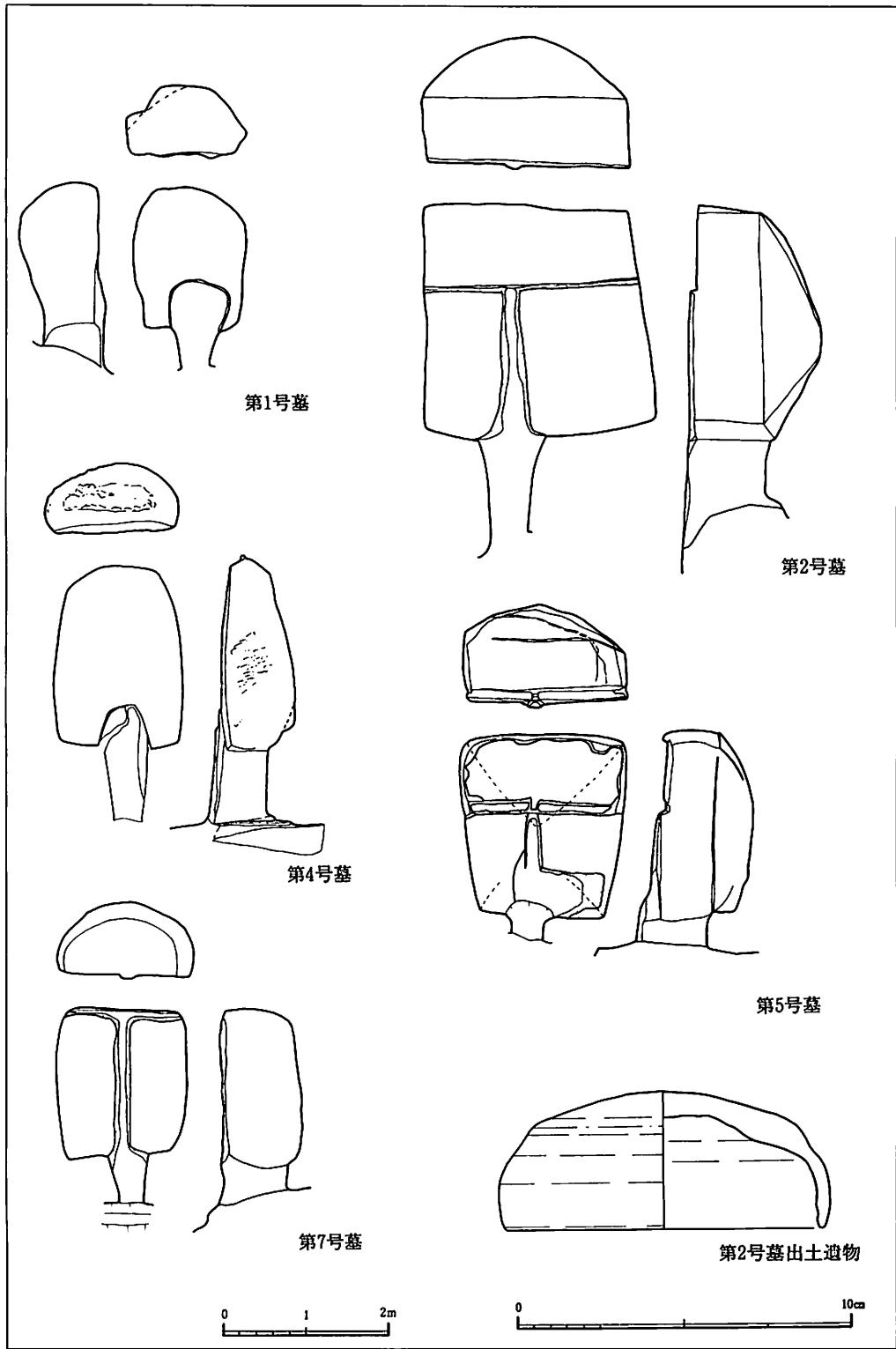
横穴墓番号	全長	羨門		羨道		玄門		玄室					遺物	
		幅	高さ	長さ	幅	高さ	プラン	長さ	最大幅	屍床	鴻	天井形	高さ	
1号墓	215	32	73	45	57	72	妻入り不整形長方形	170	135	×	×	ドーム	95	
2号墓	407	45	126	125	81	97	不整形方形	281	280	コ型	×	寄棟	159	須恵器 壺
3号墓	176	50	79	24	50	75	妻入り不整形長方形	160	133	×	×	アーチ	79	
4号墓	303	34	68	87	60	63	妻入り不整形長方形	217	153	×	×	アーチ	88	
5号墓	245 + α	49	85	29	59	87	妻入り隔丸長方形	217	203	○	○	寄棟	117	
6号墓	—	—	—	—	—	—	正方形	160 + α	168	×	×	アーチ (稜有)	118	
7号墓	231	30	—	58	49	81	妻入り隔丸長方形	174	158	×	○	アーチ (稜有)	95	
8号墓	238	51	69	63	70	69	不整形方形	175	191	○	×	アーチ (稜有)	91	
9号墓	204 + α	52	—	25 + α	65	—	妻入り隔丸長方形	180	147	×	×	アーチ	81	
10号墓	251	42	—	65	50	80	隔丸方形	188	191	×	×	ドーム	99	
11号墓	244	54	80	57	74	69	妻入り隔丸長方形	187	165	×	×	ドーム	93	
12号墓	300	37	60	87	57	60	妻入り梢円形	213	168	×	×	アーチ (稜有)	94	
13号墓	225	50	75	52	49	67	隔丸方形	177	187	×	×	ドーム (鴨居)	100	
14号墓	265	39	—	97	60	61	不整隔丸方形	165	181	○	×	アーチ (稜有)	84	

※(稜有)とは奥壁と側壁とが明瞭に区別できるものである。(単位はcm)

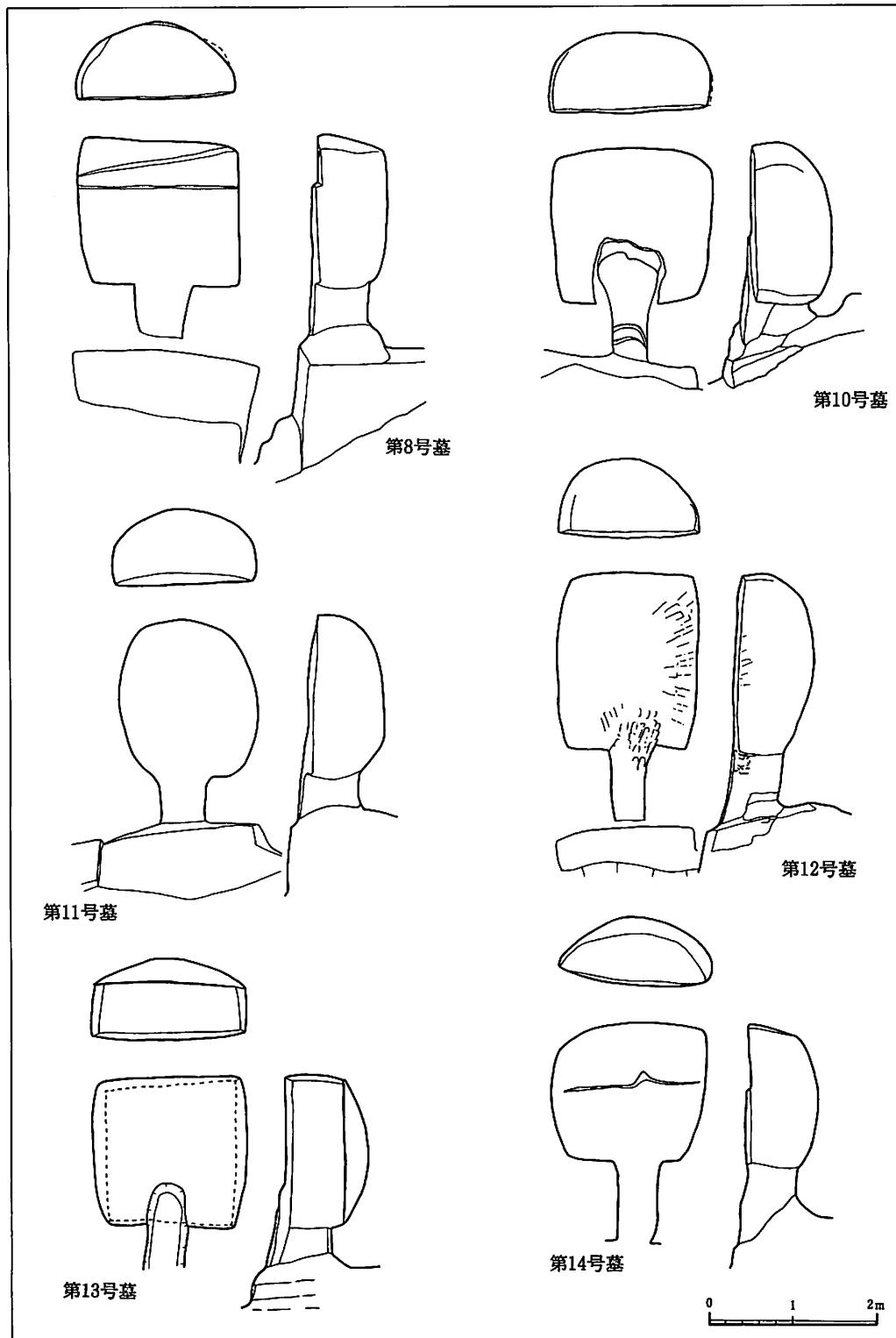
発掘調査
下郡横穴群



第36図 下郡横穴群全体地形実測図



第37図 横穴実測図(1)



第37図 横穴実測図(2)

8 古国府町口遺跡	調査担当	調査面積	調査期間	地域
	塔 鼻 光 司	1000m ²	89.11～90.01	A

古国府町口遺跡は、大分川下流左岸に位置する国府推定地として知られる、古国府地区の一角に所在する。

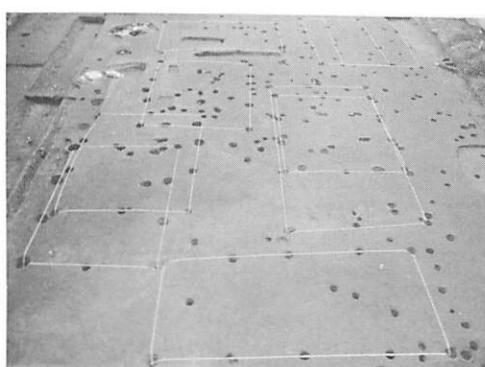
本遺跡は16世紀代の建物群からなり、溝によって区画された範囲内に、掘立柱建物10棟、井戸2基、土壙2基、方形竪穴1基が確認された。

2基確認された井戸のうち1基は、川原石を積んだ石組み井戸、1基は素掘の井戸である。方形竪穴に関しては、東北地方を中心に分布しているのが知られているが、近年全国各地でその類例が知られてきている。その機能としては、竪穴住居的なもの、地下式倉庫的なものが考えられている。掘立柱建物は、10棟確認され、その切り合い、方向性から3つの時期に分類が可能である。平均的にみて1棟約6m×4mの規模をもつものである。

建物を区画する溝に関しては、約22mという溝の間隔（条里における1町約199mを約1/5にした数値）さらに現在当地域において復元されている推定条里地割りの方向に一致している溝の方向（N7°05'をもって南北線とする。）から、ある一定の計画性（規格性）をもって造られていることがわかる。上記のように今回検出された建物群は、この溝によって区画されているが、戦国期に該当するものとすれば、当地域の性格付けに一考を要するものと思われる。

出土遺物は、備前の壺・すり鉢・鍋・小皿・环・火鉢、そして、白磁・青磁・染付等の輸入陶磁器類等である。中でも中国南部産三彩系青釉小皿は注目される。

(塔鼻光司)



第39図 掘立柱建物群



第40図 遺物出土状況

9 葛木遺跡	調査担当 坪根伸也	調査面積 1000m ²	調査期間 89.04	地域 D
--------	--------------	----------------------------	---------------	---------

本遺跡は南から北へ延びる洪積台地の西側縁辺部に位置する。標高は40m、遺跡の西側は、低地面との比高差約30mの急崖をなす。

調査は宅地造成に伴う事前調査として平成元年4月に実施し、約1000m²について表土の除去を行い遺構の検出に務めた。調査の結果、5軒の竪穴住居址と多数の柱穴を検出している。遺構検出後、施工者と協議の結果、調査地は可能な限り盛土による現状保存を行い、保存の困難な調査区中央部分についてのみ完掘を行うこととした。以上の経過に基づき3号住居址(SH03)と仮称した調査区のほぼ中央に位置する住居址、周辺の柱穴の掘り下げ、および記録保存処置を継続実施した。

3号住居址(SH03)は、平面形は隅丸方形プランを呈し、現状で5.3m×5.0m、現存壁高0.1mを測る。壁際には幅約0.18mの壁溝を巡らし、中央やや北よりに深さ約0.2mを測る楕円形土壙を有し、4本の主柱穴を配置する。

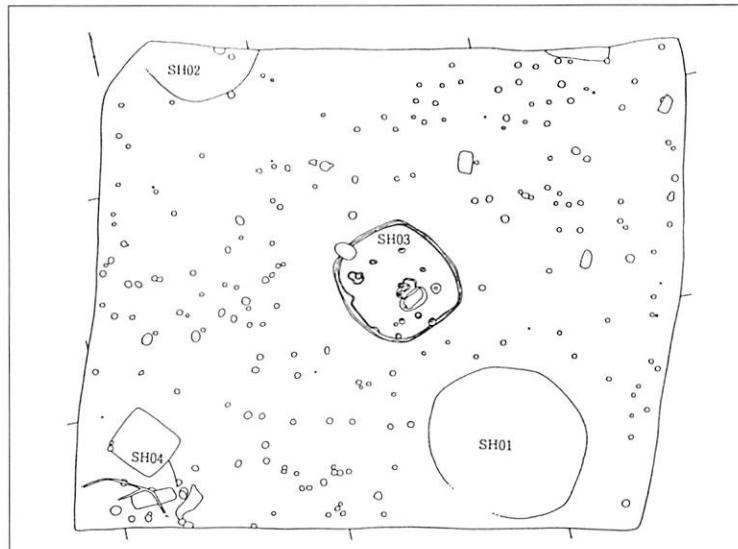
住居址内からの出土遺物は概して少なく、僅かに住居床面から出土した凸レンズ状を呈する壺形土器底部破片の存在からおよそ弥生時代後期末～終末期に比定されるものと推定される。多数の柱穴に関しては中から土器の小破片が少量出土したのみであり、時期決定を行うだけの物証に乏しく現状では厳密な時期比定は困難と言わざるを得ない。

(坪根伸也)



第41図 葛木遺跡調査区全景

発 挖 調 査
古 国 宿 口 遺 蹟
葛 木 遺 蹟

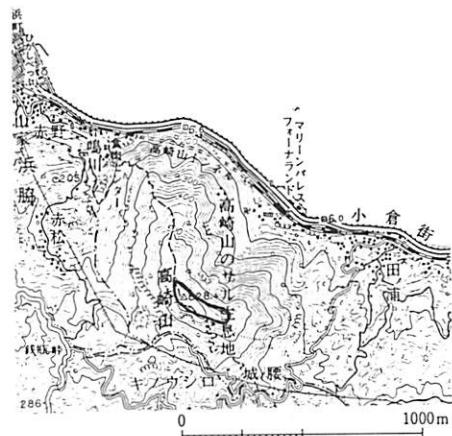


第42図 葛木遺跡全体遺構配置図(1/300)

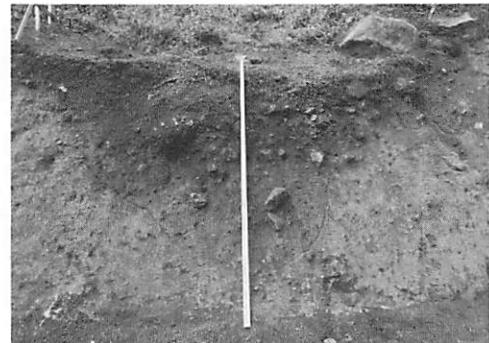
10 高崎山城跡	調査担当 玉永光洋	調査面積 堅堀11条	調査期間 89.09~89.11	地域 A
----------	--------------	---------------	---------------------	---------

高崎山城跡は、大友氏の本城として知られ、昭和61年度に実施した地形測量調査で山頂部に大小の平坦面を造成した郭を一列に配置し、山頂にとりつきやすい南側に大手口を設け、主郭は北端に、堀切りは、主郭の北側と主郭と第二郭の間の2ヶ所に置き、やや傾斜の緩い大手口側には石塁・出郭を放射状に配置し、さらに山腹に堅堀をめぐらす全長約600mの九州の中でも最大規模に属する連郭式の山城であることが確認された。年代については、城としての整備は、南北朝時代に入った14世紀後半頃、現存する遺構は堅堀の規模、石塁と堅堀の組合せ、大手虎口部の構造等の特徴から天正期頃(16世紀の後半)と考えられている。

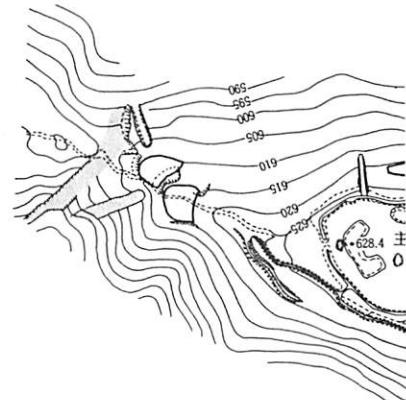
この南側山腹に位置する堅堀の発掘調査は、大分市が計画する高崎山の南口歩道工事にともなって実施されたもので、調査期間は、平成元年9月5日から11月であった。堅堀遺構は、測量調査では8条の堅堀が確認されていたが、今回の調査によってさらに10条の堅堀遺構が発見され合計18条となった。堅堀は、山頂部の施設直下(標高580~530m)に位置する群(1~9、12号堅堀)とやや下位(標高約540m~480m)の群(10、11、13~18号堅堀)があり、大手口正面のやや西側から東側の南斜面全域に分布している。規模は、幅約9m~3m、全長約90m~16mである。これらの堅堀は、ほぼ等間隔に配置されているが、緩傾斜部に位置する6号と7号堅堀の間は5条の堅堀が敵堀状に接近して配置している。また、急傾斜地の堅堀は規模が大きく、堅堀相互の間隔



第43図 高崎山城跡位置図



第44図 第10号堅堀断面図(南より)



第45図 高崎山城跡遺構配置図

も広くしているのに対して、緩傾斜地では規模の小さい堅堀を数多くするといった特徴が認められる。

さて、18条の堅堀遺構のうち、発掘調査を実施した遺構は1～9、10、11号堅堀の合計11条である。調査の結果、1、2、3、10、11号堅堀は40度近い傾斜部にあり1、3号は堀尻部、10、11号は堀頭部を確認できた。2号は検出されず調査区の直上が堀尻部と想定された。1、3号は遺存状況が悪く幅約3.5m、深さ約1mのV字形溝が土層断面によってかろうじて確認出来た。10、11号は規模が大きく幅約8～4m、深さ約2mあり、大手口正面を防御するにふさわしい規模である。さらに、V字やU字形の両堅堀間には地山削り出しによる大きな土壘状の高まりをつくり、堀底との比高差を増すことによって起伏にとんだ地形をつくり出している。4～9号は、比較的緩やかな傾斜地にあり、遺構の遺存状態はきわめて良好であった。5号が最大で幅約7m、深さ1・2mの皿状をなすものである。外は、幅4～2m、深さ約0.7～1.2mの断面VないしU字形の堅堀である。これらの堅堀は、西側に盛土をし土壘を構築する例が多く、土壘は多量の礫を混入させ、石壘状をなすものである。

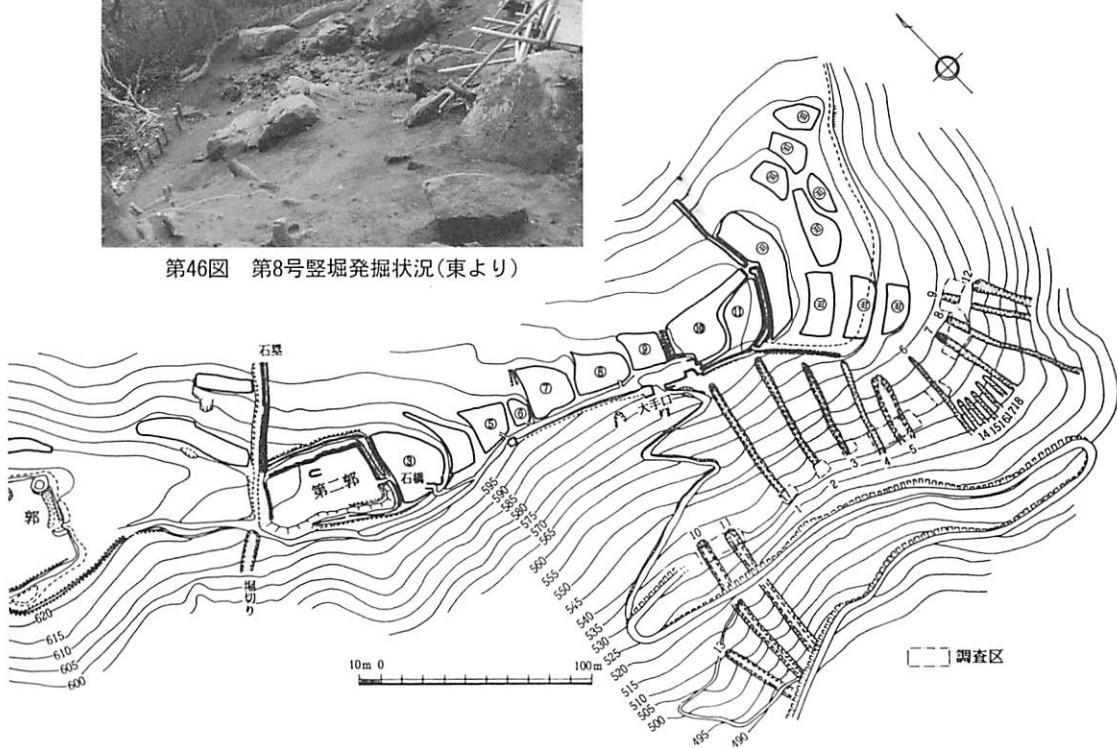
遺物は、出郭等の施設に近接する9号堅堀内及びその周辺部の表土層で土師器小皿片約300点、備前甕片数点、瓦器質擂鉢片1点など比較的多く検出されたが、他は1、4、6、8号から数点の土師器片が出土したのみであった。年代は16世紀中頃から末である。

(玉永光洋)

発 調 査
高崎山城跡



第46図 第8号堅堀発掘状況(東より)



第 IV 章 受贈図書目録

1. 調査報告書

栃木県

- 飛山城跡 II 飛山城跡追加指定申請に伴う発掘調査報告 宇都宮市教育委員会 1989
竹下遺跡 II 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第27集 宇都宮市教育委員会 1989

茨城県

特別史跡常陸国分僧寺跡発掘調査報告書－道跡排水溝に伴う発掘調査－

- 石岡市宮平遺跡発掘調査概報 石岡市教育委員会 1989
深久保遺跡 茨城県石岡市開発行為に伴う発掘調査確認書 石岡市教育委員会 1989
波付岩遺跡発掘調査報告書 石岡市教育委員会 1989
宮平遺跡発掘調査概報 石岡市教育委員会 1989
石岡市宮平遺跡発掘調査報告書 石岡市教育委員会 1989

京都府

- 城陽市埋蔵文化財調査報告書第19集 城陽市教育委員会 1989
京都府埋蔵文化財情報第31号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
京都府埋蔵文化財情報第32号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
京都府埋蔵文化財情報第33号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
京都府埋蔵文化財情報第34号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
鴨谷東1号墳第2次発掘調査概報 立命館大学文学部学芸員課程研究報告第2冊 立命館大学 文学部 1989

奈良県

- 小楓遺跡（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第50冊） 奈良県橿原考古学研究所 1986
下井足遺跡群（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第52冊） 奈良県橿原考古学研究所 1987
藤ノ木古墳概報 奈良県橿原考古学研究所 1989
奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1985年度 奈良県橿原考古学研究所 1986
奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1985年度 奈良県橿原考古学研究所 1986
生駒郡斑鳩町西里遺跡 奈良県文化財報告書第50集 奈良県橿原考古学研究所 1986
平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告書 奈良県文化財報告書第52集 奈良県橿原考古学研究所 1987
奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1986年度 奈良県橿原考古学研究所 1989
奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1986年度 奈良県橿原考古学研究所 1989

大阪府

- 八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書 I 八尾市教育委員会 1989

八尾市文化財報告20 昭和63年度公共事業八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ

八尾市教育委員会 1989

広 島 県

岩上山田遺跡発掘調査報告 広島の文化財第40集	広島市教育委員会 1988
一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告	広島市教育委員会 1988
	広島市教育委員会 1988
広島市近世近代建築物調査報告 広島市の文化財第43集	広島市教育委員会 1989
史跡広島城跡二の丸第二次発掘調査報告 広島市の文化財第44集	広島市教育委員会 1989
伴東城跡発掘調査報告 広島市の文化財第45集	広島市教育委員会 1989

福 岡 県

高津尾遺跡－14地点－ 北九州市文化財調査報告書第47集	北九州市教育委員会 1989
大穂町町口Ⅰ 宗像市文化財調査報告書第13集	宗像市教育委員会 1983
朝町山・口Ⅰ 宗像市文化財調査報告書第14集	宗像市教育委員会 1984
宗像武丸皆真庵 宗像市文化財調査報告書第15集	宗像市教育委員会 1988
浦谷古墳群Ⅱ 宗像市文化財調査報告書第16集	宗像市教育委員会 1988
福岡県宗像市大字武丸原所在遺跡の調査報告 宗像市文化財調査報告書第17集	宗像市教育委員会 1988
宗像武丸町添遺跡 宗像市文化財調査報告書第20集	宗像市教育委員会 1989
福岡県宗像市日の里所在前方後円墳の調査報告 宗像市文化財調査報告書第21集	宗像市教育委員会 1989
久福木・立山遺跡Ⅱ 大牟田市文化財調査報告書第33集	大牟田市教育委員会 1989
上白川遺跡 大牟田市文化財調査報告書	大牟田市教育委員会 1989
福岡市埋蔵文化財年報Vo.1、2 1987年度	福岡市教育委員会 1989
吉武遺跡群Ⅳ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集	福岡市教育委員会 1989
広石遺跡群 福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集	福岡市教育委員会 1989
四箇遺跡群－第23次調査報告書－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集	福岡市教育委員会 1989
峯 遺 跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第197集	福岡市教育委員会 1989
羽根戸古墳群－羽根戸古墳群E群の調査－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集	福岡市教育委員会 1989
福岡市四箇遺跡（四箇遺跡群第22次調査）調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集	福岡市教育委員会 1989
田村遺跡VI 福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集	福岡市教育委員会 1989
柏屋郡柏屋町戸原麦尾遺跡(Ⅱ) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集	福岡市教育委員会 1989
吉 塚 1 福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集	福岡市教育委員会 1989

福岡市西新町遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集	福岡市教育委員会	1989
博多 都市計画道路博多駅築港線関係	福岡市教育委員会	1989
埋蔵文化財調査報告(Ⅲ) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集	福岡市教育委員会	1989
博多 都市計画道路博多駅築港線関係	福岡市教育委員会	1989
埋蔵文化財調査報告(Ⅳ) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第205集	福岡市教育委員会	1989
板付周知報告調査報告書(14) - 1987調査 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第206集	福岡市教育委員会	1989
唐原遺跡Ⅱ - 集落址編 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集	福岡市教育委員会	1989
那珂君休遺跡Ⅳ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集	福岡市教育委員会	1989
老司古墳 福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集	福岡市教育委員会	1989
板付周辺遺跡調査報告書(14)	福岡市教育委員会	1989
高畠遺跡第12次調査地点 福岡市埋蔵文化財調査報告書第210集	福岡市教育委員会	1989
福岡市南区野間B遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第211集	福岡市教育委員会	1989
福岡市有田・小田部第10集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集	福岡市教育委員会	1989
福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第213集	福岡市教育委員会	1989
福岡市西区広石南古墳群 福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集	福岡市教育委員会	1989
愛宕遺跡Ⅳ 北区菜園場所在 北九州市埋蔵文化財調査報告書第74集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1988
上徳力遺跡2(都市モノレール小倉線関係) 北九州市埋蔵文化財調査報告書第77集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
徳力土地区画整理事業関係調査報告2(徳力遺跡第2-1,4地点 上徳力遺跡第9地点)	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
北九州市埋蔵文化財調査報告書第78集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
高津尾遺跡1(2区の調査) - 九州縦貫自動車道関係文化財調査報告15-	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
北九州市埋蔵文化財調査報告書第80集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
隠蓑・山ノ神遺跡 - 九州縦貫自動車道関係文化財調査報告17-	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
北九州市埋蔵文化財調査報告書第81集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
岡遺跡 - 九州縦貫自動車道関係文化財調査報告16-	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
北九州市埋蔵文化財調査報告書第82集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
菊水町遺跡2(Ⅱ区の調査) - 九州縦貫自動車道関係文化財調査報告18-		
北九州市埋蔵文化財調査報告書第83集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
高津尾遺跡2(12,19区の調査) - 九州縦貫自動車道関係文化財調査報告19-		
北九州市埋蔵文化財調査報告書第84集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
貫川遺跡2 - 貫川都市小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2 -		
北九州市埋蔵文化財調査報告書第85集	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989

紅梅(A)遺跡 2 北九州市埋蔵文化財調査報告書第87集

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989

上徳力遺跡 1 - 都市モノレール小倉線関係 - 本文編 -

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989

上徳力遺跡 1 - 都市モノレール小倉線関係 - 図版編 -

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989

豊前国府および正道遺跡昭和63年度発掘調査概報 豊津町文化財調査報告書第8集

豊津町教育委員会 1989

佐賀県

大黒町遺跡発掘調査概報 3 塩田町文化財調査報告書第3集

塩田町教育委員会 1989

藤ノ木西分遺跡 I 直鳥四本松遺跡 千代田町文化財調査報告書第9集

千代田町教育委員会 1989

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第11集(1987年度)

佐賀県教育委員会 1989

筑後川下流用水事業に係わる文化財調査報告書 2 佐賀県文化財報告書第93集

佐賀県教育委員会 1989

佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書 7 佐賀県文化財報告書第94集

佐賀県教育委員会 1989

礫石遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(9)

佐賀県教育委員会 1989

老松山遺跡 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(10)

佐賀県教育委員会 1989

佐賀工場団地内遺跡 佐賀市文化財報告書第23集

佐賀市教育委員会 1989

立野遺跡・村徳永遺跡(C地区) 佐賀市文化財調査報告書第24集

佐賀市教育委員会 1989

大日遺跡 佐賀市文化財調査報告書第25集

佐賀市教育委員会 1989

村徳永遺跡(A・B地区) 佐賀市文化財調査報告書第26集

佐賀市教育委員会 1989

収蔵品目録(第1集)

佐賀市教育委員会 1989

みやこ遺跡Ⅱ(みやこ・小野原遺跡) 武雄市文化財調査報告書第19集

武雄市教育委員会 1989

瓊屋遺跡 武雄市文化財調査報告書第20集

武雄市教育委員会 1989

西尾遺跡 - B地点 - 伊万里市二里町所在遺跡の調査概要

伊万里市文化財調査報告書第25集

伊万里市教育委員会 1988

道祖瀬城跡(伊万里市大川内町所在遺跡の調査概要) 伊万里市文化財調査報告書第26集

伊万里市教育委員会 1988

西尾遺跡 - C地点 - 伊万里市二里町所在遺跡の調査概要

伊万里市文化財調査報告書第29集

伊万里市教育委員会 1988

長崎県

岡遺跡 - 彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 - 東彼杵町文化財調査報告書第2集

東彼杵町教育委員会 1989

白井川遺跡－彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査－東彼杵町文化財調査報告書第3集

東彼杵町教育委員会 1989

九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI

長崎県文化財調査報告書第93集

長崎県教育委員会 1989

大分県

豊後国都甲在2 国東半島莊園村落遺跡詳細分布調査概報

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

三光村の遺跡 三光村文化財調査報告書第1集

三光村教育委員会 1989

長野カジャゾノ遺跡 国東町文化財調査報告書第5集

国東町教育委員会 1989

池部朝鍋遺跡

竹田市教育委員会 1989

菅生台地と周辺の遺跡XIV

竹田市教育委員会 1989

昭和63年度岡藩 錢座跡

竹田市教育委員会 1989

相原廃寺 昭和63年度中津地区遺跡群発掘調査概報(1)

中津市教育委員会 1989

黒岳周辺のイヌワシ－生息緊急報告－ 大分県文化財調査報告書第77集

大分県文化財調査報告書第78集

大分県教育委員会 1989

弥勒寺 宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

下郡桑苗遺跡 七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書 大分県文化財調査報告書第80集

大分県教育委員会 1989

大分県文化財調査報告書第78集

大分県教育委員会 1989

宮崎県

蓮ヶ池横穴群 保存整備事業概報III

宮崎市教育委員会 1989

車坂・山下遺跡

宮崎市教育委員会 1989

西ノ原遺跡－大淀1号古墳－ 一般国道10号宮崎西バイパス事業に伴う発掘調査報告書

宮崎県教育委員会 1988

国衙・郡衙古寺跡等遺跡群細分布調査概要報告書I

宮崎県教育委員会 1989

宮崎県文化財調査報告書第32集

宮崎県教育委員会 1989

昭和63年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書

宮崎県教育委員会 1989

辻遺跡 清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書

清武町教育委員会 1980

若宮田遺跡発掘調査報告書

清武町教育委員会 1979

角上原遺跡群 清武町埋蔵文化財調査報告書第3集

清武町教育委員会 1989

鹿児島県

鹿児島市中世城館跡 鹿児島市文化財調査報告書(6)

鹿児島市教育委員会 1989

2. 定期刊行物・図録等

市史にいがた5

新潟市 1989

宇都宮の旧跡	宇都宮市教育委員会	1989
文化財研究展示室見学の手引	宇都宮市教育委員会	1989
宇都宮市文化財年報第5号（昭和63年度）	宇都宮市教育委員会	1989
千人頭月番日記（二） 八王子千人同心関係史料集第2集	八王子市教育委員会	1989
八王子千人同心関係文書目録第2集	八王子市教育委員会	1989
東京大学文学部考古学研究室紀要第7号	東京大学文学部考古学研究室	1989
八王子宿のうつりかわり 平成元年7月25日～8月27日	八王子市立郷土資料館	1989
文化行政権推進資料集－文化行政に対する理解を促進するために－	厚木市	1989
市政100周年記念誌なごや100年	名古屋市	1989
仏舎利埋納	飛鳥資料館	1989
飛 天	飛鳥資料館	1989
八尾市文化財紀要4	八尾市教育委員会	1989
やまぐち郷土読本	山口市教育委員会	1988
蘇った遙なる邪馬壹国	土佐上古代史研究所	1987
埋蔵文化財調査室年報5 昭和62年度	側北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
研究紀要－第3号－（埋蔵文化財調査室開設10周年記念特集号）	側北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1989
福岡市埋蔵文化財センター年報第8号	福岡市埋蔵文化財センター	1989
福岡県史 近代史料編 福岡藩御用帳（一）	福岡県	1988
福岡県史 近代史料編 福岡藩御用帳（二）	福岡県	1988
福岡県史 近代研究編 各論（一）	福岡県	1989
福岡県史 近代史料編 筑豊石炭鉱業組合（二）	福岡県	1989
福岡県史 近代史料編 柳川藩初期（下）	福岡県	1988
福岡県史 近代史料編 農民運動（二）	福岡県	1988
文明のクロスワード第30号	博物館等建設推進九州会議	1989
五世紀の北九州 ‘倭の五王’ 時代の国際交流	北九州市立考古博物館	1989
昭和62年度（1987）	福岡市埋蔵文化財センター	1988
福岡市埋蔵文化財センター年報第7号		
宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報1988	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1989
古墳文化の世界－豊の国の支配者たち	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1989
鹿児島大学埋蔵文化財調査年報VI	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	1989



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることによって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 1

1990

発行日
平成2年12月31日
編集・発行

大分市教育委員会社会教育課文化財室
大分市荷揚町2番31号
〒870 (0975) 34-6111
